

釜石医療圏の脳卒中パスと当院の関わり

釜石ファミリークリニック 院長 関 薫

釜石医療圏は、昭和 40 年頃より始まる製鉄所の衰退とともに極端な人口減を経験した。この間、複数あった病院は維持され圏内のベット数が過剰となり、平成 19 年 4 月に急性期病院であった県立釜石病院と釜石市民病院の合併が行われた。その際、釜石市民病院閉院による市中心部の医療の空洞化をどう解決するか、さらに同院で訪問診療を行っていた 300 人超の在宅患者の受け入れ先をどうするかという点が問題となった。釜石市はこの点を解決するため、旧釜石市民病院を市の保健福祉部門、慢性期病院、開業医、社会福祉協議会等が入った混合施設として特区申請し、釜石保健福祉センターとして再生することにした。当院は内科医 2 名、脳神経外科医 1 名の計 3 名にて同センター内で開業し問題となっていた訪問診療の患者をそのまま受け継いだ。

同時期、岩手県により盛岡市とともに釜石市が脳卒中パスのモデル地域として選出され、運用が開始された。脳卒中パスでは、重症患者をどう受け入れていくかが一番の問題である。当医療圏では、家族の協力により在宅で受け入れ可能な重症患者は訪問診療で支えている。自宅での受け入れが困難な重症患者は、国立病院機構釜石病院が最終的な受け入れ先である。しかし、国立病院機構釜石病院での受け入れは不定期であるため、県立釜石病院と国立病院機構釜石病院を繋ぐ中間施設が必要である。釜石のぞみ病院は、開設時より中間施設として県立釜石病院より重症患者の受け入れを行っている。当院医師は、パス患者を受け入れた際は、釜石のぞみ病院の非常勤医師として主治医となり診療を行っている。また在宅患者が自宅での看取りが困難な場合や主たる介護者の急用や急変により患者の受け入れに窮した場合、入院での検査が必要な場合、連日の点滴や呼吸管理等で入院が必要な場合でも、のぞみ病院は入院を受け入れ、当院医師は主治医となって診療を行っている。当院と釜石のぞみ病院は、同じ施設内の単なる 2 医療機関というだけでなく、脳卒中パスの中間施設として、さらに訪問診療患者や家族を支えるため密接に関わりあっている。

現在、釜石医療圏の脳卒中パスには、せいてつ記念病院や県立大槌病院も加わり、より多くの患者が中間施設で受け入れ可能となっている。